



TITLE:

質疑欄

AUTHOR(S):

CITATION:

質疑欄. 天界 1939, 20(223): 19-21

ISSUE DATE:

1939-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167893>

RIGHT:

質 疑 欄

彗星が発見された場合には初めの3人までの発見者の名をさるこになつて居る爲め、1939d の場合には岡林氏の名が洩れるのだこの事ですが、急報に記載の如く、「ハセル・岡林彗星」と呼んでも差支へないものでせうか。(大阪, M. W.)

答へ。一人ならず、二人ならず、幾人もの人が同一の彗星を獨立に発見することは屢々あります。例へば、1910a といふ彗星などは、餘りに発見者が多過ぎて、今に至るも其の最初の発見者が定まつてゐません。すべて獨立な発見者は同じ名譽が與へられ、星の名にも其等の人々の名が悉く附せられるべきです。しかし、實際としては、毎度々々餘りに長々しい名を呼ぶのは面倒ですから、(敢へて発見者の名譽を手加減するわけではありませんが、其の時の都合によつて) 代表的に一二の人名のみで其の星を呼ぶことが、便宜上行はれます。——最近の例は、かの 1939d 彗星です。此の星は Jurlof 氏(露國 Votkinsk 市で 4月15日)、Achmarof 氏(露國 Balesino 村で、同15日)、Hassel 氏(諸威國、同16日)、岡林滋樹氏(日本倉敷、同23日)、Barlow 氏(英國)、Buchar 氏(チエク國 Prag 市)、Friend 氏(米國カリフォルニア洲)、Kozik 氏(中央アジア Aschabad 市)等々、多くの人々が獨立に発見しました。それで、コペンハーゲン天文臺内の國際天文電報中央局では、一々此等の発見者の名を呼ぶ煩を避けるため、便宜上、最初の3人の名を以つて今後は此の星の名を呼ぶこととする旨を、同所發行の第 765 號回報に發表し、爾來、同回報では此の星を“Jurlof-Achmalof-Hassel 彗星”と呼んでゐるのです。しかし、此の規定は、上記の通り、只、コペンハーゲンで、便宜上、勝手に定めたので、決して國際會議で定めたわけではありません。實際の便宜上から言へば、三人の名を呼ぶのも面倒で、せいぜい二人が良いと思はれます。こんど場合には、ハセル氏の発見が最初に中央局に達したのですから、單に“ハセル彗星”で良いのですが、しかし、我々日本人としては、同胞岡林君の名譽を忘れることが出来ませんので、“ハセル岡林彗星”と呼ぶことにしたのです。(山本)

再び天文用語に就いて

西 森 生

天文學を修め、同好の友と交はりを結び、數種の天文書を閱する時常にまとはり付いて來るのは天文用語の相違の問題である、スペクトルとかコロナとか

云つた言葉は何處の人も同じ様に發音するが、「遊星」とか「惑星」とかになると全くの初心者は別の星と思ふ。

天文用語界では東京の流儀を重んずる人もあるが、然し東京流にも拙作があつて承服し兼ねる。私が8月號に述べた私見の骨子は星座名を「發音假名遣ひ」に書き改めて見る事が眼目である。

私が「きりん」は「ジラフ」が良いと主張するのは「銀河」の第2卷第5號中の飯塚理學博士の記事が最も雄辯であらう、星座名の中には動植物や地理神話實に關した物が多數を占めて居るのだから、一般の動物學者が斷然「ジラフ」を使つて「きりん」が誤りだと指摘したならば共に従ひ、畫家が畫架を「がが」と云へば共に従ひ、物理學者に排氣器を使つて居れば「はいきき」を採用すればよい、私は星座名に就いては其關係する多方面の人々に意見を徵するつもりで居る。天文用語の審議にはかく言語學者や國文學者や外國文學に通じた人々の意見を聴かねばならない、獨り決めが最も悪い。8月號の私見が全面的に反駁の欠面に立つても私は私見を述べた丈で、其を固執して押通しはしない、將來天文用語の統一問題が醸された時の參考資料のつもりで書いたもので、私見の由來・理由に就いては「京星」第18號に詳しく述べたので是非併讀されたい。

今後天文用語に意見を有する人々は其席に出て大いに吐露して頂きたい。

——本誌第210號の草場氏の文に答へて——

小 山 理 學 士 の 追 憶

神 田 茂

8月11日に理學士小山秋雄君御急逝の旨の報知を受取つたのは8月19日正午頃であつた。全く事の意外なのに驚いた。それは數日前手紙を頂いた許りであるからで、調べて見れば日付は記されてゐないが、8月10日の消印で8月12日に到着してゐる。(中略)

小山君は京都帝大在學中恐らく昭和3-4年の頃東京天文臺官舎に來訪せられ變光星に關する諸文獻を熱心に單記して行かれた時に會つたのみで、其後再會の機會がなかつた。其後數年間は手紙の交換も甚だ稀であつたが、近年になつて東亞天文協會變光星觀測月報を毎月送つて來られる様になつてから、時折手紙を同封して來られた事もあつた。本年になつてから數回手紙を頂き、その中に上京して一度會いたいといふ事も一二度記されてゐたので追つて御上京の計畫でもあつた事かと思はれるが、終に再會の機會がなかつた事は誠に残念である。

君は變光星の觀測研究に専念始終せられた。馭者座、小狐座附近の變光法則未知星の觀測は大學在學當時から其後に亘つてなされたもので主に花山ブレテン結果の要が發表されてゐる。白鳥座 SS 型の星の觀測研究は大學時代以來長く引き續いてなされて居り、近年は木邊、小澤、杵掛等の諸君も協力觀測せられ、東亞天文協會關係の觀測者の仕事として最も重要なものであつた。その結果は花山ブレテンの他ドイツの雜誌アストロノミツシエ・ナハリヒテンにも發表され、その別刷は倉敷天文臺の報告第一號として發表されてゐる。

東亞天文協會員變光星の觀測は同君によつて取り纏められ、時々花山ブレテンに發表され、又本年 6 月には「東亞天文協會變光星報告」第一號が發表された。その大部な原稿の整理、謄寫版原版の調製、印刷等に多大の努力を費された事を想像する。

終りに東亞天文協會關係の變光星觀測者の方々はよく小山君の遺志を承けて變光星の研究上有力なる觀測資料を學界に提供せられん事を希望するものである。

小山君が前途有爲の身を以て業半ばにして不歸の客となられた事は、我が變光星學界のため誠に惜みても餘りあるもので、今や熱心なる後繼者の輩出が望ましい次第である。(2598—8—31)

大阪プラネタリウムだより

□今夏の恐ろしい旱魃は、都會にも直ちに影響し、科學館では率先して、プラネタリウムのドーム内の冷房を中止し、エレベーターも一臺限りにして、極力電力を節した。このためドーム内は、満員の際は室温 34°C にも昇り、星空の説明には何とも似つかぬ雰囲気であつた。

□8 月中は、夜間公開と相俟つて、度々「天文趣味の夕」が催され、佛教上の宇宙觀あり、俳句に現はれた星の話あり、星に纏がる行事、傳説などあつて夏の夕べは賑やかであつた。

□9 月は爽快な秋空を仰げばとて、23 日と 24 日の兩夜、天文協會大阪支部の應援で、「月と木星」の觀望會を開いた。尙 24 日は宮森支部長の「月を語る」講話もあつて、楽しい「星」の一夜であつた。

9 月 28 日、錦曜クラブの方々が、プラネタリウムの名月を尋ね、夜に入つて「世界各地の月」について、座談會を催されたのは愉快であつた。

□10 月 3 日午後、科學館の電氣館とプラネタリウムとから、全國の小學校へ見學中繼放送を行つた。(10. 4. 高城)